

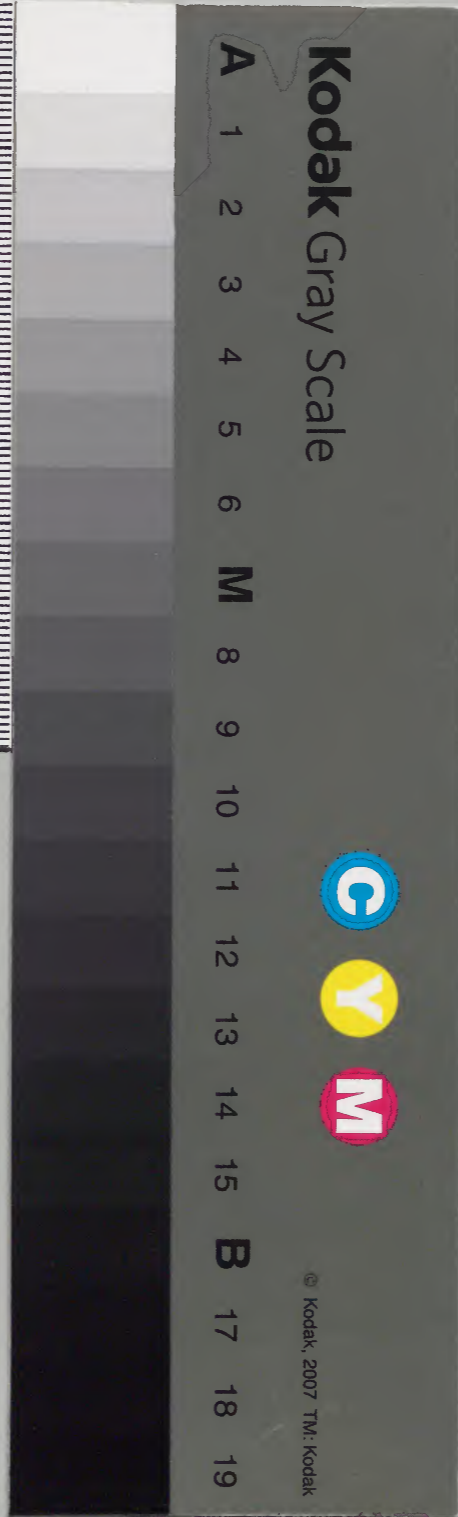
政化間記

三

内閣文庫	
番號	和 33172
冊數	10 (3)
函號	150 140

内閣文庫			
架	冊	號	類
五 〇	一 〇	三 三 七 三	和 書

共十



糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり

政化間記卷之三

山本正邦献上副本

11

乘達院 稱

真改

八月十二日

淑姬君 稱 十一月 涉入 漢 儀

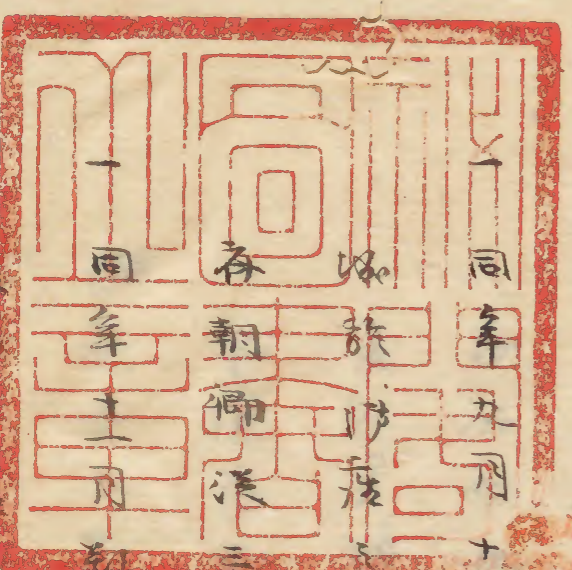
信

出

今日 尾張 大 約 之 教 涉 也

味 之 涉 也

中 日 涉 謁



同

年

九月十二日 尾張 大 約 言 教 德 川 慎 十 代 教 涉 也

同

族

同 涉 對 願 慎 十 代 教 之 腹 涉 一 字 以 進

存

朝 御 漢

位 中 將 叙 以

同

年

今日 淑 姬 君 稱 涉 入 漢 涉 道 之 尾 張

教 涉 守 殿 下 以 在 涉 留 守 舟 荒 差 源 右 介 子 家 跡 荒

沙琴者... 謂

細今日... 多...

同二日...

同十一日...

始...

的十五日...

沙連...

今又...

沙...

自...

十人...

目...

册...

全...

通...

家...

後人列居通樂已先 城江也伊祝儀中上於席

伊謁

御見桶添安後對馬也 御壘後松平伊言也伊依也

荒出喜也於伊座之間 伊日見

伊供也悔也而也於席也吸也伊酒也也

但今日教中繫斗目也袴也五九也腹紐也神麻上

下雨伊九也伊退出後平膝

同十六日伊入壘也悔也為伊祝儀紀伊教多戶教多

戶中將教初諸大名諸寄取諸也諸役人等會也

面也出仁於席也伊志中伊謁西九也出仁也也

同十九日淑姬君換伊入壘後又半時也伊佐瑞也初

而大桑也也為 入同日尾張大納言教伊也 城

四時伊也書院也 出御伊對額 但尾張中將教也 平川也也大桑也

城伊也 西御伊口等狀上以下也也 同日紀伊中納言

教多戶中納言教多戶宰相教伊也 城於同席伊

對額

同日三日尾張大納言教淑姬君換伊入壘也後也也

也居伊礼伊也 城於御白書院西伊福賴伊也中

門口為日講之儀也... 同第... 門... 講... 儀... 同... 第... 門... 講... 儀... 同... 第...
 同又月廿六日儲君御方親王宣下... 戶... 中... 將... 殿... 侍... 者... 差... 出...
 一 同又月廿六日儲君御方親王宣下... 戶... 中... 將... 殿... 侍... 者... 差... 出...

御事

儲君御事... 仙洞... 兼仁是時... 才三之皇子御母...
 中... 後... 堀... 園... 院... 皇子... 寬政十二年正月廿二日... 誕生...
 生若... 稱... 同年... 二月... 七日... 儲君... 同日... 廿六日... 親王...
 同十二日... 大猷院... 様... 百... 二十回... 沙... 忘... 沙... 法... 事... 詠... 日... 光...
 山... 沙... 執... 行... 伊... 豆... 子... 之... 具... 不... 備... 段... 人... 沙... 法... 事... 是... 連... 向... 日... 走...
 將... 殿... 侍... 者... 差... 出... 在... 同... 第... 高... 家... 諸... 庶... 沙... 奏... 者... 差...

光 御於席、沙包中沙錫

同十四日沙法事沙十日有沙之家方今法者其出

同十五日法法事中有今日月次沙禮之出法之面

於席、沙包中沙錫沙之家方今法者其出也

同日今日五時之沙法儀為上野 大猷院様御矣

前、沙系法

同日一日沙法事其後、今日沙之家始為出法於

席、沙包中沙錫五九、出法也

大猷院様御事、 台德院様沙婿男御母堂、

豐后太閤秀吉之養女

實、贈大納言淺井長政
息女、後大御所、奉祿

御謚崇

原院殿 慶長九年七月十七日江戸五九に御誕生

沙墓目酒井河内守忠重
御養力酒井右近太夫也

竹千代君、奉稱同年

十一月八日山王に御立奉後沙庄九に御座

若君様と奉祿

葉、九に慶長十二年 台廟沙庄

之和二年十一月一日西凡に沙移渡同六年二月

五日五九に於て正三法同十一日權大納言三月

一日宣旨 同年九月七日沙名に進 家光公

或云是日沙元被送二位權大納言統年録に是
大納言様沙名に、家光若君様沙名に、忠長

久戸教御名宗「預房」國師日記に元年九月又日
以余に金地院涉城一に在る石大如及上野在對
馬及涉養者少し涉對面若君極涉同校涉名宗
字切了尸上由云 江出同六日於涉城金地院涉
名宗流對涉若君極涉名宗山之記に及る
由傳養流に上由之則名宗書身字切を涉
日に及る 家光國師字日如涉意に入大高了
所由了書之大方に涉養力如涉石余流持
了書了停書之或說抑了涉之暇と涉史涉之暇と
事を了く涉或說抑了涉之暇と涉史涉之暇と
きに於て涉之暇と涉伊酒并等の涉代涉之暇と
加冠涉理勢出を初して涉に信了專史の
去面目に涉城に今年涉年同八年四月
十七日涉了せり涉に不考同八年四月
日光山御社系同年九月十五日涉鑓古始同九年
三月十五日兼右近衛大将同年四月日光山 御

社系同年七月御上洛 同月七日内太信正三位
紀年録右大将如元今 征夷大将軍濟和紫子兩
始葉室家勅文に涉り

院別高源氏長者石馬寮御造半奉兵杖を賜ふ
り涉 伏見城に於て御流任也 是 同日八日御

系同 同年八月九日將軍室下涉設儀下石以上
此見城一乞此同十三日二條此に於て涉於

元和二日還御後於江戶城涉禮了る
元和十年二月 元年十一月十日西九方御府九の涉
月晦日改元 同年十二月十九日朝鮮聘使乞

涉禮是年同遷極仁不動堂八丁保新地に遷

嚴寺建是年諸士之云卷沙改同二年三月十八日
川部一沙放鷹同十四日還御是也後同沙放鷹
牧奉に違あり同七年七月日光山御社系同三
年八月沙上落同月十二日御幸同十八日從一位
比太臣九月二日主上後水尾院二條城一祈幸同年
十月九日江戸還沙是年分二條城在在表坊不
各是を前以時沙表流斗三十人決但分善人
年各同十年坊也但沙を各同十一年人沙表十二
但一人を同十二年坊也同四年九月新日上野御
諸學造表也同十七日遷遷是也東廠山寛永寺

圓頓院と号同又年四月日光山御社系同云
年二月沙鹿庵同年四月日光山御社系同年九
月六日云家諸法夜以作出同年十一月新日
後水尾院讓位莖按四年二月云同七年六月十
日琉球使也降沙礼同九年九月十二日明正院
即位後水尾院廿二同九年四月日光山御社系
同年十一月二日七免入進也表三十人
同年九月八日十人表士に沙加増也下二百
後高小似也是も百後院御是も一増也上も

一八同十九年十二月十六日にも二十八人伊加恩多
以之に同十一年も二十人不足に在任の伊切原百
俵宛り下しとせしむる二百俵高し如し一
時取替りし者斗りて場不立ありしは同

十年二月十日午石以下伊小姓細流書院表

大伊原より下に二百石宛法加増元高塵米の者

一八同十九年十二月十六日にも二十八人伊加恩多

以之に同十一年も二十人不足に在任の伊切原百

俵宛り下しとせしむる二百俵高し如し一

時取替りし者斗りて場不立ありしは同

十年二月十日午石以下伊小姓細流書院表

大伊原より下に二百石宛法加増元高塵米の者

一八同十九年十二月十六日にも二十八人伊加恩多

以之に同十一年も二十人不足に在任の伊切原百

俵宛り下しとせしむる二百俵高し如し一

時取替りし者斗りて場不立ありしは同

十年二月十日午石以下伊小姓細流書院表

大伊原より下に二百石宛法加増元高塵米の者

一八同十九年十二月十六日にも二十八人伊加恩多

以之に同十一年も二十人不足に在任の伊切原百

俵宛り下しとせしむる二百俵高し如し一

時取替りし者斗りて場不立ありしは同

十年二月十日午石以下伊小姓細流書院表

て下は 江戸川 菅々 中下 儀請 に入 江戸 云々 多て
江戸 菅々 中下 儀請 に入 江戸 云々 多て
江戸 菅々 中下 儀請 に入 江戸 云々 多て
江戸 菅々 中下 儀請 に入 江戸 云々 多て
江戸 菅々 中下 儀請 に入 江戸 云々 多て
江戸 菅々 中下 儀請 に入 江戸 云々 多て
江戸 菅々 中下 儀請 に入 江戸 云々 多て
江戸 菅々 中下 儀請 に入 江戸 云々 多て
江戸 菅々 中下 儀請 に入 江戸 云々 多て
江戸 菅々 中下 儀請 に入 江戸 云々 多て

言老蒙人 江戸 菅々 中下 儀請 に入 江戸 云々 多て
言老蒙人 江戸 菅々 中下 儀請 に入 江戸 云々 多て
言老蒙人 江戸 菅々 中下 儀請 に入 江戸 云々 多て
言老蒙人 江戸 菅々 中下 儀請 に入 江戸 云々 多て
言老蒙人 江戸 菅々 中下 儀請 に入 江戸 云々 多て
言老蒙人 江戸 菅々 中下 儀請 に入 江戸 云々 多て
言老蒙人 江戸 菅々 中下 儀請 に入 江戸 云々 多て
言老蒙人 江戸 菅々 中下 儀請 に入 江戸 云々 多て
言老蒙人 江戸 菅々 中下 儀請 に入 江戸 云々 多て
言老蒙人 江戸 菅々 中下 儀請 に入 江戸 云々 多て

西九 菅々 上 酒井 雅乐 江戸 菅々 中下 儀請 に入 江戸 云々 多て
西九 菅々 上 酒井 雅乐 江戸 菅々 中下 儀請 に入 江戸 云々 多て
西九 菅々 上 酒井 雅乐 江戸 菅々 中下 儀請 に入 江戸 云々 多て
西九 菅々 上 酒井 雅乐 江戸 菅々 中下 儀請 に入 江戸 云々 多て
西九 菅々 上 酒井 雅乐 江戸 菅々 中下 儀請 に入 江戸 云々 多て

九に同年閏七月十一日同十三日又了石江上 并御

主之分御印を以下 但御上洛 八月十日江戸

還伊同年九月日光山御社奉同十二年二月九日

伊譜代大名乃云伊藤氏 伊藤氏 伊藤氏 或云

百石又十兩十年後返納坂上池院記に七月七日

伊藤氏大名伊藤氏 伊藤氏 伊藤氏 伊藤氏

金之し見 同年六月一日奉命之 伊藤氏奉命之

伊藤氏時占 諸大名交代四月に定免之 同年

十一月十五日初に奉中の月費定免之 伊藤氏

伊藤氏時占 諸大名交代四月に定免之 同年

同奉 同奉十二月二日駿府城天守台上同十三

年正月十二日始て評定所を設同年四月日光山

御更伊改造は是月御社奉同奉六月朔日新設

通用 伊藤氏 伊藤氏 伊藤氏 伊藤氏 伊藤氏

是年奉社順御印改あり同十四年十月日肥

後嶋原即種 伊藤氏 伊藤氏 伊藤氏 伊藤氏 伊藤氏

士の的射 上寛同十五年二月即種 伊藤氏 伊藤氏 伊藤氏

年品川東海寺伊藤氏 伊藤氏 伊藤氏 伊藤氏 伊藤氏 伊藤氏

同十六年八月十一日伊藤氏 伊藤氏 伊藤氏 伊藤氏 伊藤氏 伊藤氏

上西九日渡御同十七年二月新宮水同年四月
又日涉床九日涉移渡是月日光山御社系同十
九年四月同所同年五月九日涉譜代大名之文
智六月一日定ノ不家東ノ順知ノ廿年交替ノ以
行出同二十年六月朝鮮六郎使来聘光 是光
行十代君涉誕生に依て之同七月三日日光山
御社系礼同年八月七日始て新宮水廻を為シ
是光元年二日 同年十月三日 明正院讓任同
出妻云紀ノ如 後光明院即位 後水尾院皇
年十一月廿一日 同 御諱紹仁同

年十二月廿一日寛永諸家系家壘功如也幸太田海
中守資定御刀を承順具余ノ様旨賜有之云保
寛永二十一年十一月廿六日改元 元年八月十日品川東海寺ノ涉
如涉自公事涉裁断大老在中集考同年十二月廿
又日国繪巻を調進 奉行一井上能後也 同二年
今年ノ禁裡に於て毎年伊勢日光奉幣使を三
らふ 白石ノ神事に日光幣使御願に 今里伊勢
日二 是年外世倫 并 江戸迫急在々ノ道所ノ處
屋を造り同三年十月廿日明国兵乱平戸一宮

授兵乞下修諸大名は 派出多同四

年十一月十二日王子が於て大進物 上寛 以年薩

久の家に於て所の武を 台寛に何人か修

御孫容多て今日に及ふ 上寛所の御孫を

南に東面四十六間南北四十一間南面中央に

上座を據て西座所と諸大名の御孫の面

に於て見物馬場の上寛所を障子事十

二間ありて四十間全四間に於て是を設

て光久の家位三十三段各鳥帽子未だ行騰塗

重後藤目矢一本を持て馬に大席を敷

是を之に於て上は次子と各十二段を奉

行候見物次大引おの役人日記所の侍の介

に有已ありて大正寛を放川上子の村に十

二段あり一人宛桐平ありて馳し是を射上子

の六子射了りて下子十二段代り次子未だ如

く射了りて下子十二段代り次子未だ如

を三子の犬進物と申す好きて又之子を毎

此刺し終りて沙茶をに於て寛久嫡子又三

帝兩人の沙茶を賜ふ寛久父子御刀を執り父

子一し御刀を賜ふ同十三日寛久父子寛

礼中上太進物前一家に於て伊波 菱安 二保 五

を下りて事道多う記に之を 菱安 二保 五

改元 元年四月日光山社同二年十月三

日同十三日伊波前三年以上 精勤を賞出

て黄金を賜ふ 皆勤上勤 同三年三月廿六日

始て火消し没二人は 九月 概して以曆四年

二年八月廿一日又三人同三年十一月廿八日又三人

寛文二年二月九日又三人元禄八年二月十八日又

三人延宝格是人之宝永元年十月十三日常火消

後又十 同四年四月廿日薨御伊年四十八同

口三日東殿山一御入権同廿六日同所伊出権

同廿九日日光一伊着権又月六日日光山伊葬

遂同十七日勅使宣命任下向勅謚 大猷院殿贈

正一位大相国

御墨所 鷹司煇政信房公息女 御諱 孝子中

延宝二年六月八日薨本理院殿と奉称小石川

傳通院へ伊葬送 以貴 傳に 一 元 和の末あり

伊増礼 五 道 家 ありて 孫 國 の 伊 娘 也 之 子 也

君子の多き 命 ありて ありし 一 兩 一 也。 牙 琴 の
ありし 一 也。 命 ありて ありし 一 也。 牙 琴 の
子 ありし 一 也。 命 ありて ありし 一 也。 牙 琴 の
命 ありて ありし 一 也。 命 ありて ありし 一 也。 牙 琴 の
命 ありて ありし 一 也。 命 ありて ありし 一 也。 牙 琴 の
命 ありて ありし 一 也。 命 ありて ありし 一 也。 牙 琴 の

一 同日 三 日 又 百 姫 君 所 伊 事 御 墨 所 伊 養 也 係 出

同日 伊 色 也 一 伊 綴 式 多 一

一 同 年 田 四 月 二 日 日 光 山 に 於 了 大 猷 院 様 百 又

十 四 日 忌 伊 法 事 也 所 川 舟 今 日 伊 能 多 一 日 光 御

門 跡 多 戸 殿 姫 下 石 以 上 嫡 子 在 上 野 一 山 出 家 中

其 介 諸 人 諸 多 氏 諸 物 所 布 衣 以 上 一 伊 没 人 也

城於大廣間 沙日見沙能見也云 係於序々
沙管應沙科理以下

一同四日今朝娘君候沙誕生 所生女一規吉之節
三身女於一也

同又日右身今日滿儀高家流沙卷者多諸所取
布衣以上之沙没人也 嗚沙祝儀十上於序々沙
為中沙謁五凡 出仁云々

同十一日沙出生候沙事奉娘君候之云祿云云 仁出
竟政三

一同年又月十二日奉娘君候沙事 御表様沙養云
仁出

同十二日今日御津凡沙禮出候加平加賀了物了石
以上之面々交代奉合 布衣以上之沙役人中矣
沙小姓五凡 出已中刻也 大納言様沙白書
院上 出御 御目見

但澤帷子出袴退出云 西沙九沙意中若年矣凡

廻初

一同年六月十七日 有德院様五十回沙忌身沙法事

今日初日

同十八日沙中日 同十九日沙結禊日

同日今云此時之伊呂孫多上野 有德院様

御靈茶御廟上伊呂孫

同日一日有之今日出仕多之於席之伊呂孫中法

謁五九之出仕多之

有德院様伊事之紀伊中御言充貞卿伊呂男伊

母之巨勢八尾山利清女 於後落除淨 貞孝久

年十月二日紀伊初分山に伊誕生伊幼名源六

而君後新之應君之錄九年十二月十一日從四位下

權女將主說既伊名頼子朝臣同十年四月十一日

越前國丹生に於て新規之百石伊孫順宝永二

年十月六日御兄宰相頼職卿伊孫源紀伊家流

桐蔭同年十二月二日從三位右近衛權中將伊

諱字伊丹順吉宗卿同三年十一月二日參議同四

年十二月十八日權中御言 享保三年七月 元年四月

廿九日 有章院様薨去是日二九日 入御 伊邊言

後同年五月朔日大統伊丹源氏 作出同日

今日上様奉祿同日七日同日伊代替伊

禮同年八月十三日 將軍室下三二位權大納言

淳和味字兩院別當源公長右大臣大將軍兼右
 近衛大将右馬寮御監牛車兵杖右衛門左衛門
 是日乃大臣今日占 云方様と申構同二年三
 月十一日云家滿法衣云 信出同年八月十一日願
 知も伊条下と下同口日新金出書に信之乾
 字金も信之引替り申也上にあずかり負致近日
 減少の信之乾字金通用之事萬石年々未定年
 之之今年限翌子年分世上之通用一切停止多
 不為き分云 信出 憲法類所禁守記を合出
 考ふに 憲法類所禁守記を合出 八年

には長金限を改定新金限を造り見多し是
 を元字金限と云是より長金限無任錢にて諸
 物の價平なり諸人通用に因ら同御代宝永
 三年に之の福の限を改定新限を造り子
 品元福の省也 照座の市代是を憂む多
 少の蒙長の純金限の製に漫り水人事を思召
 といふも之福の右限の製に漫り水人事を思召
 と古製に漫り人事を天下の貨金を考ふ也
 と平事ありし小利一歩利に及ぶの限を去て
 造り純金斗にて造り子年分通用に形小なり
 を乾字金と云宝永七年分通用に形小なり
 無形小なりし諸人通用永持と爲らうと云ふを
 知りて通用に造りし限ハ世改造の事也
 信出の事一と云は信之二年分伊勢守の事也
 近江守の事と云は信之二年分伊勢守の事也
 伊てあつたを造りし是を二宝三宝と云ふ
 伊世に並に通用しし金三兩限云云は信高
 下より多くて物價平なりし 信出 章廟伊代信徳

初丁駒場野涉放鷹 或... 延多持を七年駒場 同年

十一月十三日琉球使電 如伊礼同四年六月廿二日

始て小夢後死を 与居何之... 小夢後

普法不配ハ人 行分二百石以与... 普法

三年六月十二日小夢後死 四人... 小夢後

以時分二百石 并伊礼見... 小夢後

死に居せ 不伊道... 小夢後

多死 小夢後... 小夢後

並ト如伊礼 一... 小夢後

研村新岡山 先に旅して始て涉流士... 小夢後

上寛有 時服涉帷子各了を賜... 九人宛

十七人 之或... 献廟伊礼... 上寛

隅田川 に於して... 上寛

足時 小川... 上寛

嚴唐 伊礼... 上寛

十人 方伊礼... 上寛

使電 海伊礼... 上寛

様伊 靈屋... 上寛

日吹 上に... 上寛

六月 二月... 上寛

汗 を... 上寛

量金を納ぐる。各善あり。同年八月二日始て
評定不の騰を以訴状を出さ。同七年三月
初て大身場見也を動。火災多き所は同年五
月同十一年二月勅内郭外凡也。始て同十二年
三月勅所鞠所元山王山川町故因所法初色
葉葉を禁也。元十二年三月尾信借金に
行身江戸町戸火浦いりは但を定楚。不
家を得也遺物献上を止也。馬
以寛示の以方画主。主以下。あはし見高
。隱居六。伊礼。時。是。始。し。之。伊。番。莫。以下
。白。浪。又。百。枚。之。百。枚。以下。一。同。年。四。月
。山。時。分。十。分。一。減。也。一。同。年。四。月
有章院様七回伊志勅會万部。伊法會。可伊

辭退を以十部。伊法會。如。是。分。後。伊。代。伊。伊
。同。年。十。二。月。十。六。日。東。照。言。御。誕。生。支。干。土。伊
。お。高。少。身。伊。祝。之。同。八。年。二。月。十。八。日。布。衣。以上
布衣。以下。諸。汲。人。之。伊。汲。高。を。定。楚。之。是。津。高。法
汲。言。に。是。之。勤。汲。中。伊。高。上。如。是。言。に。如
高。是。之。言。諸。汲。人。伊。高。流。を。之。如。伊。加。増。如。一
。同。年。少。身。伊。中。伊。高。初。中。年。以下。之。伊。高。言。伊
。切。兼。不。伊。汲。伊。高。入。十。二。月。に。伊。行。身。以。分。之。今。年
。分。以下。一。所。文。化。八。年。十。二。月。十。日。之。後。之。今。年。分
。同。九。年。三。月。晦。日。其。之。伊。門。境。矣。之。後。伊。再
。年。七。月。二。日。始。て。甲。府。取。岩。之。石。を。是。也。同。年。八
月。十。二。日

小普請 中 新 同 十 五 日 訪 査 任 務 者 等 之 記

石 出 伊 登 入 記 作 付 布 衣 以 下 伊 登 人 新 伊 登 小

十 人 但 之 同 九 年 十 月 十 五 日 初 而 五 九 新 伊 登 三

但 之 記 同 十 三 年 三 月 十 五 日 新 規 一 但 出 身 四 但 七

二 記 後 座 同 十 年 三 月 十 七 日 小 金 至 伊 登 特 同

年 十 月 七 日 大 判 金 次 改 亦 多 十 二 月 小 通 判 以 后

き 分 記 作 出 之 福 次 替 の 大 判 任 五 一 一 一 一 一 一 一

一 枚 二 兩 曲 角 の 携 行 同 十 二 年 之 月 新 日 年 場 以

於 了 大 的 上 覽 西 伊 登 大 伊 登 初 々 是 年 小

聖 十 二 年 以 起 多 道 橋 亦 亦 石 川 小 田 向 者 所

小 邊 河 底 色 葉 葉 令 禁 止 其 尾 孫 借 金 記 後

并 是 公 先 五 年 一 回 兩 京 郵 候 一 寄 付 保 借 金 記

信 自 同 十 二 年 四 月 山 伊 社 系 同 十 四 年 二 月 五 日 於

次 上 伊 庭 初 了 伊 場 始 了 亦 有 小 笠 系 種 了 知

公 毎 年 定 次 一 如 同 十 五 年 十 二 月 十 五 日 伊 登 傳

伊 家 人 函 宛 以 一 五 百 石 以 下 上 活 借 金 記 後

伊 登 伊 保 七 八 年 以 上 半 報 年 一 下 同 十 七 年

八 月 三 日 法 皇 院 靈 元 崩 御 九 十 同 二 十 年 三 月

只一中御門院讓位同年五月十一日天下伊一流

支干伊流高木等 元和元年乙卯二月七日大坂居城 伊祝儀伊能

有之同年七月十三日大川岸月於て初而伊小性

但伊書院の爲士及是伊馬方の馬川流を 上

寛 伊馬方を是人伊下等一人部合八人 後日下て

谷金三枚を賜り伊下等一人 根を以て 是方先

知中川梅の伊如の時伊流方より伊流を以て

伊不伊流に於て 上流に遊遊し 伊流を以て

伊不伊流に於て 伊流を以て 伊流を以て

伊不伊流に於て 伊流を以て 伊流を以て

伊不伊流に於て 伊流を以て 伊流を以て

伊不伊流に於て 伊流を以て 伊流を以て

伊不伊流に於て 伊流を以て 伊流を以て

伊不伊流に於て 伊流を以て 伊流を以て

伊不伊流に於て 伊流を以て 伊流を以て

伊不伊流に於て 伊流を以て 伊流を以て

伊不伊流に於て 伊流を以て 伊流を以て

伊不伊流に於て 伊流を以て 伊流を以て

伊不伊流に於て 伊流を以て 伊流を以て

樂 上寛同年十一月三日 櫻所院即位 中御門院皇子

明神 夏年山石川伊東園に養生所を建つ見取

獨の首を治養せし終る 伊醫師小菅隆公

慶長を修し候て所 元文 享保二十二年 元年五月

十二月金限之製改通用 出是を文字金限

と云 章廟の正徳五年伊先師の伊造名に与

年 徳廟伊代世せりて 伊造法を拜乞

りし 元文元年を凡口三年の同世に初たり

るに新金造りて一時号に与る 伊次金限

令しき 伊通用の元福乾合ニ与る合して新金

を乃に造りて 同用の伊致少く候て是を正

七さん 乃に今年に与りて 小判一分判下根

を判士次節あり 伊留言 正徳の新金百

而 文金百支の積りて 伊留の時金度 文金

而西に頃刻三十五支を 出せり 根七同様に

し 十月四日に 正徳の 出せり 伊時 八十四

年を修て 文以二年文 同二年四月十一日 中御門

正金限の 出せり 同二年四月十一日 中御門

院崩御 三十一 同年五月三日 東叡山 浄象院 柳

御冥瓦 并 本坊 丹波下寺 多延焼 同三年三月 海

日遠 國寺 伊崎高由 乃 乃 乃 定 乃 乃

出 同年九月十八日 菅原 伊藤 同年十一月十八日

分口 三日を 中迄の 大嘗會 御再興 統紹 運録を

同五年三月一日特旨乃て教伏冷泉大納言久為

卿 兼室大納言 頼胤 隅田川遊覽沙饗應乃 九麒麟

竹丸出の沙和出の辰乃刻而御龍のりふ子不

高富一人伊日有二人お雛伊同明以培如治匠

流小培伊以船路上下湊嶺新若木母守境口仮

亭を設けしき伊答應西卿派分あり委しく道

能うまの御 寛保 元文三年三月 元年八月七日

御轉任右大臣延喜 寛保四年二月 二年二月十三

日方十七日迄於江原山 御更伊深争法萃八

講御執行 御高録にり延喜二年三月廿七日

漢修也 不先 去年如至右道将等より法系八

川 伊代に於 伊見是を 伊代々乃伊法令

沙修行り遊り初有 素照 云の沙法令如遊

事はして乙申三月八日乃伊書写ゆり遊り伊

八講と唱せしき 伊深争法系八講と唱せし

程伊ハ講日光山伊ハ講を記 又杖藥拾葉集出

心 程多書 授山 伊政云 又杖藥拾葉集出

先 諸書少 授山 伊政云 又杖藥拾葉集出

白 和謹て 授山 伊政云 又杖藥拾葉集出

山 文亦七年十月七日 先院の園を向へて

の 洞戸を 授山 伊政云 又杖藥拾葉集出

思 二法 授山 伊政云 又杖藥拾葉集出

日 法 授山 伊政云 又杖藥拾葉集出

正 德 二 年 四 月 後 土 御 門 院 辰 年 伊 八 講 之 記 文 明



御言沙勒法うは遊名幸に滝山寺古蹟
 あり園法要実の比に沙在也沙信作其地に
 有る間波地に御言沙造美之事幸平左夫
 酒井讚岐守青龍院亮兼三人より
 御言地見多し一は波地より御言二年五月
 沙夢後初り同年九月沙造畢
 二徳三年十二月十
 七日滝山寺
 未だ主領沙多所収ふに之河園滝山寺ハ東
 文沙順頼田那滝山村二百八十石山斗余同那東
 河内村より二十石七斗余計合云石十二石事
 多計之畢計二百三十四石八斗年中行事科六十
 四石七斗余修理料百七十二石四斗余ハ其科百
 四十九石九斗余寺僧死高順光行之并寺中境内

貞政十二

山林竹木免許之者守此旨神系諸役國家
祈念佛法銘除のに懈怠之祈仕此如候

同^{貞政十二}年八月十四日光御門蹟有徳院様沙法事お

沙日迄沙登之有沙光 沙度之間 御對願畢

而於沙黑書院沙答應多々

但殿中深惟子麻上下着用

同月十九日孝善録五十卷編集成其事に就。林大

学以具外儒者由没之者ハ時酸白銀出之以下^考

録ハ先仁命令下して沙順抄順片忠多ハ者沙
 美獨君一者ハ行此ハ書上ハ之学問所少ハ編集

少ハ印行ハ行身書辨
 少ハ爾事ハハハハ

寛政十二

一 同年九月五日

大和言様 伊予彦彦 彦彦 彦彦 彦彦

伊予彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦

彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦

伊予彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦

彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦

一 同年十月五日 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦

彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦

彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦

彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦

彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦

彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦

彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦

彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦

彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦

彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦

彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦

彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦

彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦

彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦

彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦

三百石迄二人、三人、五千石以上、押屋帳二人、三千石
六百石迄、押屋帳三人、三千石以下、押屋帳一人、
其落、同伊波人、押屋帳一人、押屋帳長柄、年、
勢、事、信、臣、之、筆、石、連、川、供、之、者、右、人、致、准、一、所、小
勢、上、十、舟、事、右、通、急、夜、の、所、守、川、也、御、信、之、者
凡、信、用、至、不、十、川、根、化、信、宜、中、舟、通、を、も、通、に、信、舟
通、之、信、に、不、五
寛政十二
同、年、十、二、月、初、日、植、村、後、河、守、大、納、言、様、伊、所、若、年

多、紅、伊、舟、舟、於、美、落、之、同、伊、在、中、伊、列、彦、布、衣、以
上、様、今、之、面、之、信、後、五、九、之、舟、も、同、所、伊、在、中、以
行、後、之、

一、同、十、三、年、二、月、十、三、日、今、日、年、号、改、元、享、和、元、年、之、也

信、出、川、舟、舟、出、信、之、於、席、之、伊、在、中、伊、列、彦、信、彦
達、五、九、之、舟、以、信、之、

一、同、年、三、月、十、一、日、峯、姫、君、候、今、五、日、時、之、伊、供、端、に、て
山、手、上、伊、之、集、掃、御、之、臣、田、中、屋、形、上、伊、之、集、掃、御
伊、之、面、之、信、於、席、之、吸、也、伊、酒、之、下

同、年、四、月、廿、日、今、五、時、之、伊、供、端、之、上、野、大、融、院
様、伊、靈、前、之、伊、系、端、還、御、之、臣、聖、堂、之、信、遊、伊、系、端

聖、堂、之、事、之、寛、永、六、年、冬、臣、之、御、法、印、林、道、春、之
別、取、忠、因、江、戶、印、繪、品、を、極、好、し、に、の、号、同、所、一
今、東、叡、山、山、王、の、色、紙、の、号、同、所、一

尾張大納言義直卿一堂を建まあり聖像并四
配の像を安置せしむ先聖殿の三字お額を製
祭器若干を到て多附多同十年二月十日先
聖殿に於て初て釋菜の禮を以て同年七月
四ノ大猷院様東廡山 御ましし年詔の還涉
道まし家塾に添御先聖殿 御覽あり返春の
男治致ん春高の時乃治三年十二月廿五日其國聖
堂修補料金二百兩以下寛文四年十月通鑑編
集涉用月分爲國宅地に國史館を造る同十

年六月に序朝通鑑如就一奉一うん先に國史
館に附らし一十九十五の如涉扶持其以來云
事并諸生教育の科亦賜る分り 作出四男大
學以信篤の時元禄二年二月廿五日 常憲院様
卜釋菜之昨を献上し同年九月廿八日信篤の如
岡の聖堂へ涉系詔多給一と云 作出同年十
二月廿一日け系詔其以後致意涉系詔多給同三
年七月九日聖堂を其岡に神田聖に移り給一
と云 作出同四年二月廿五日新堂成先聖殿

を改大聖殿と稱し是乃公儀の學校と如篇額

殿、裏書室、永三年三月、正任、高入、徳門、木櫃

或云、作高門、時、明院、基、時、杏、檀、門、林、信、萬

入、徳、門、樋、口、強、門、と、云、按、以、に、元、禄、十、六、年

十一月、廿九日、石、川、方、出、火、大、聖、殿、焼、亡、室、亦、に、去

り、伊、再、使、の、時、伊、額、と、り、可、新、に、を、一、と、又

明、院、基、庫、の、一、を、に、改、ら、せ、一、と、未、詳、に、也、に、是

時、信、萬、還、俗、一、と、後、五、任、下、大、学、院、の、叙、任、一、は

小、姓、但、多、氏、格、と、如、是、年、三、月、二、日、大、聖、殿、一、は

多、法、同、十、日、去、而、久、良、表、郡、以、て、千、石、の、地、多、ら

ぶ、先、之、九、十、五、人、杖、持、を、令、聖、堂、諸、入、用、と、一、と

去、り、一、所、五、代、大、学、院、信、敬、の、時、寛、政、二、年、三、月

廿七日、増、杖、持、多、く、百、二十、人、杖、持、と、如、信、敬、の、養

子、大、学、院、儀、の、時、同、九、年、十、二、月、廿、日、聖、堂、法、則、之

事、を、言、上、せ、し、り、其、儀、所、多、に、叶、ひ、千、石、百

三十、人、杖、持、を、収、め、せ、し、き、濟、州、の、摩、末、千、五、百

儀、法、加、増、多、く、聖、堂、の、事、是、乃、終、て、三、儀、伊、入、用

に、九、代、同、十、年、二、月、廿、日、聖、堂、伊、再、建、を、以、て、去

年、伊、言、を、信、明、朝、臣、坂、田、櫻、津、守、正、敷、朝、臣、も、以

て、伊、用、を、勤、ら、し、同、十、一、年、十、一、月、に、也、新、堂、如、同

月十一日大聖殿遷座あり今の聖堂是なり
 の後に善い学問新造是伊藤本伊家人
 鎮二男三男尼余々皆学問行教育の爲に是を
 の学校に大名の家の中或は浪人の如きの書生等
 居せし不是を止し其の家の人々斗つ教育を
 伊藤尾藤良佐古賢所外ハ屋敷を具側に於て
 是に在りて日々学問新に出席して教示に於
 本任の者ハ清くして家畜の如きも其の如し
 を寄並として寮を清くして其向集令けし又
 伊藤妻海新と稱し毎月三夜定日ありて本衣以
 上以下伊藤の人等合け寮航小善修伊藤目見以下
 一者伊藤西崎の家任は出席聴け清新ハ林大等
 即是ハ正月兩口斗を満け其在ハ林百兩生節
 夫如尾の良依古賢所外ハ由清助講作高門の
 日講ハ貴賤を殊とて其通を其者聴け其如き
 為にハ首座の時是を爲るは是ハ林家の書
 生如ハ石け家分法用是以下ハ其家出役あり

是を新し聖堂役人ハ伊藤目見席ありて聖堂取巻
 但既同上者同下者如と云者出巻上者下
 多ハ以下席ハ是寛政十二年三月
 海田是土の事任出さ其あり

一 同四月廿二日今朝姫君様伊誕生 平生女ハ言
 辰女 根江三席堂
 秋長

同六三日右ノ方端張高家流流伊奉旨者清多院清也
 既布衣以上ハ伊役人也 端伊祝儀十之於席ハ
 伊老中伊謁云凡ハハ出仕ハ

一 同六七日伊由老原伊奉旨姫君様ハ在任 御墨塚

伊養江 三〇

享和元年

一 同年六月七日太田儀中守病氣不癒、通伊老中
伊免

太田儀中守資愛朝臣、撰清書資後嫡子元文
四年生宝曆十三年十二月十九日遺順、死遠江伊
豆三河五下石余遠江國掛川城明和五年七月
歿、伊奏皆後永平四年八月廿八日寺社奉行兼
没同七年閏五月十一日死凡養年分同年九月十
八月伊中丸若年分寛政元年四月十一日諸同代
同四年八月七日病、依、辭職同、三年三月歿

日御意中

一 同年七月十一日牧野伊流、老中加判、列、任、
与布衣以上詰合、面、上、於、夏、暮、之、回、伊、意、中、伊、列、
度、長、後、渡

牧野伊流、与、志、精、朝、臣、之、駿、河、与、志、寛、嫡、子、宝、曆
十年生、明和三年八月廿二日遺順、死、後、之、回、
之、門、七、万、四、千、石、余、長、岡、城、天、明、元、年、四、月、廿、一、日、
伊、奏、皆、老、七、年、十、二、月、廿、二、日、寺、社、行、兼、寛、政、四、年
八月廿八日大坂伊流代同十年十二月八日寺社所

司代亭和元年七月十一日涉在中文化十二年十

月十三日辞職

亭和元

一 同年九月九日今燒涉男子横涉誕生 可生女二尾
吉三席正貞

女於
筭勢

同十一日右舟為涉祝儀今日滿落高亦涉流涉者
涉者多既諸物即布衣以之 涉役人乞 御祈席
涉老中涉謂而九月出生也

一 同十二日涉出生取涉事松平兼千代殿之孫也

御墨極涉養云 經七日

一 同十八日月光院棟五十四回涉忌涉法事也今日居

同涉機熾高家涉流涉養者當也 城取席之涉也

中涉謂

一 同十九日今朝增上寺月光院棟涉牌前也 御各代

植村駿河守

月光院棟 町医原勝因壽連也 於表代後 勝

因後後寺中愛養妹也 文照院棟 奉仕

有章院棟涉母堂也 文廟堯御之後落飾月光

院殿と称以正徳三年十一月十三日從三從宝曆

六年九月十九日逝去六十四増上等の葬送

享和二年二月廿八日大意同 出御阿蘭陀カビタ

コウエセルフキテナル 六十四 役人マニテニマツ

テニ外科ヘルマアニスレツテ一三十 参上 但献上物 十六品

同年三月廿日右所那カヒタニ日時服三十

大納言様方二十日下於大廣間四之同所先中法

列座は修復

阿蘭陀唐山の肥前長崎に來舶一商ヲ遇セ

姑々星州將軍之世歐因豊臣兩家ニ時暫至菱

長五年諸国一流席也一年命を塚浦に阿蘭陀

本国ニ日本ハ極西に當リ歐羅巴洲の北に

國都をアムステルダムと云ふ其地七をあり阿蘭

陀ニ其一家之本國方咬啞也其地七をあり阿蘭

並に諸尼利亞 即イキリス也環海異國に今ヲ

以英國ノ都府をロンドンと云ふ其地七をあり阿蘭

トイトルフルカと云ふ西南に當海と北に斗に

人等恒めて大船一艘來去一通航を修ふ

後其奉奉行急言上一無船江戸浦に廻

一先うも云ふの如遠る難じて風波の甚る破

船一蘭人士幸うして其地より其海道を經

是ノ考以。元龜元年長崎津に南京船初
て聖岸として高貴を遂く向後海津と定む
嶺に在り。聖年大村の家法を以て地割を定む
鳴玉所大村町外浦町平戸町文知町櫻井所
三町是を境と爲す。後時多町梳崎町今町三鴻町内
下町出津文分二十余年を以て文禄の初也又
二十三年所出津を以て町の人々高木町馬場門後
多忠太高橋四郎を以て新七町田宗繁白
倉如庵吉岡九郎を以て馬場町多橋川三多山
井左衛門出津の町高木町後時多町田四人町
幸多と如是なり。又町割を以て元龜の初に
之。四十町と定む。天正十五年豊後太田西征
の時長崎の事を治まるとして。初め長崎
此地に有る船を以て。初め長崎を以て。初め長崎
神社佛閣を以て。初め長崎を以て。初め長崎
の之。初め長崎を以て。初め長崎を以て。初め長崎
進退。初め長崎を以て。初め長崎を以て。初め長崎
宗を禁は。初め長崎を以て。初め長崎を以て。初め長崎

て長崎奉行を以て。初め長崎を以て。初め長崎を以て。初め長崎
の代官を以て。初め長崎を以て。初め長崎を以て。初め長崎
の同年を以て。初め長崎を以て。初め長崎を以て。初め長崎
代り同十一年長谷川氏を以て。初め長崎を以て。初め長崎
元年長谷川氏を以て。初め長崎を以て。初め長崎を以て。初め長崎
寺信を以て。初め長崎を以て。初め長崎を以て。初め長崎
年普我を以て。初め長崎を以て。初め長崎を以て。初め長崎
古祐一竹中氏を以て。初め長崎を以て。初め長崎を以て。初め長崎
二人と如満年を以て。初め長崎を以て。初め長崎を以て。初め長崎
の之。初め長崎を以て。初め長崎を以て。初め長崎を以て。初め長崎
代り元和二年去次平蔵を以て。初め長崎を以て。初め長崎を以て。初め長崎
の之。初め長崎を以て。初め長崎を以て。初め長崎を以て。初め長崎
代り高木氏を以て。初め長崎を以て。初め長崎を以て。初め長崎
阿蘭陀江戸白糸止の事。初め長崎を以て。初め長崎を以て。初め長崎
如浦氏の家来者派て毎年外平戸を以て。初め長崎を以て。初め長崎
西川氏に在り。初め長崎を以て。初め長崎を以て。初め長崎を以て。初め長崎
初禮中寛永十八年長崎下移

てとる以来 奉行の権便あり同心通以下
致十人美流下不時ある同一年寛文元年も毎年
四月十二日長湯と祭一登堂二月お出三月お出
寛政二年お是を阿蘭陀船二艘の如く一艘
と如く銅も百貫目と如く六十貫目に減し
毎年江戸参上も 年月と如く唐船の如く嘉靖
隆慶の如く 永禄年中 移りし如く 嘉靖
中後流の交易は万曆崇禎の如く 天正長年兵
乱を避て長湯に来り 倭と類し者多し船

致も多く海島一丸等の口産する阿久根能茶
の博多豊後府の肥前五嶋平戸大村長崎土
佐浦に各岸に長九長湯あり唐通詞の
商人出見元和三年寛永六年の間唐人南京
津不福等の三寺を建寛永十二年向後唐船長
湯漢一方に往來せし他は漢に往來を禁せ
らるる船舶の定致十三艘の外寛政二年お減し
て十艘の如く列祖成績羅山文集松葉記事等引
て日本大明有神合符天文以来 魚世今須
商議 古至是明商船五嶋夫目周 性也末干長

峯藤原比之間明堂之事白之敬府神祖使林
道春作本多三純藤原書遠福建道總督子貞
峯吾初上明通信使事及當此皇朝治平朝祥未
聘琉球臣服安南交趾古城羅嶺呂宋西洋珠寨
諸國莫不止書翰室明堂三宜以勅合符通信
結好雖暑正純藤原之名而共實運之明主政用
神祖之印章藤原授二書于性如致之怒督而子
身猶狐疑竟不復書勅合之不成然南京福建商
舶每歲未干長崎至今不絕
初之時堪今一異以不見馬也

一 同六日西邸御劄并打平元之應打平鐵茶子養子
作身名於御白書院涉意中涉列光御茶子
身修後之

元之應劄一稿大德台臨海卿九男母堂八中

村久多清之女寬政十二年二月九日誕生

同十一日峯姫君換涉髮室之涉後儀多之

享和二

一 同年四月六日紀姫方細川兵部太傅白婚姻事

卷之為法歛涉之家方古使者以善出於斷端之

間涉老中涉謁之

紀姫方一稿大德台臨海卿四女母堂八中村

久兵衛女天明二年誕生寬政七年六月廿二日

細川弘中守森茲嫡子六之助
太清白經
保田亭本

二年四月六日婚姻

一 同年五月七日 今朝姫君御誕生
可生女
左邊改
女於

同九日 右有今日 溜法高家 法亮 涉 奉 皆 友 諸 家 既

諸 物 除 布 衣 以 上 涉 後 人 光 臨 禮 中 上 於 席 上

涉 老 中 涉 謁 之 五 九 日 七 日 出 仕 之 也

一 同十三日 法出 生 御 奉 御 姫 君 御 奉 稱 御 墨 様

御 養 身 行 出

一 同年七月八日 涉 流 産 様 御 奉 上 野 御 墨 様 白

御 名 代 矣 々

